伊勢

215
2057
32

準貴

UNIVERSITAS KEIOGIJUKU
9

東京帝國大學圖書館藏

保ものお

義勢か三男ゆうのかみ陸奥守朝いへさみやく
ちゝまゝ彩くをなる紙若侍
まてれたせうゝしけいをんの歌いくさみ
うけまけさせまひ来ひ歌ふ為ち給ふ西
坂かまてゝ文のはゝもめされちゝくさえ
くしゆきいみうさ松のあゝうゝ長
をくきさせ給ひよもかのくとあくゝまて
坂ふきふみられゝもるき君の山まそ海よ
りきけう　はゝ年ゝ十二歳いつちうゝやこみ

帝國圖書館藏

はんせうときいはうの庵まれみをむまみ
めすをおおふふをめきふ松かせふから
さきしうゆきの乃乃　あきうさしめ丸事
なまけさうはうく松かをつきうふきねと
ようろひをけおとろあ乃けをきひけ
きうの乃はさうせをけえにけるてそおちられ
をうさきともゆきを矣のめいしやうてあう
梅ふきのをのう爰よひけきうきうをそも
せくいのうとをふ乃をきふ松かをふそのの
ようを的をまけ今いを追ひてそうらん松く傷

をうねざう雑ひやう兵のそのてふうを中こよ
ぎ乃乃名をうぐさんうりをきよ紀ぐ自害ぐ成
せんとてゆきの乃よふ志ぐ松りあきはをぐの
まりりよを法かけ絵一巻とりいうをろ志川
うふあををしてをひをからをぐんじやうよ
ををよきぐういと思名をるくいきをつき松よ
うを者をうをろよりのうさきるをひ人れ
二人はまく京のうさへと縁ー成

れ和歌は国をおさめ人をなごめ
ます門なるやなんとおもひ
人と信云業成うけ給ふ所幸みやとやそは
そもちくまりはけまた
覧して我い人めの紙はくむものちろ
はそ[芳志子]ふすけてうとちろは法
ひろ彩りあまいまちりきみをは伊ふきれ
すそよもぬせくきのく法日とは我幸
ありまくいなのろきの法紙はくゆうの
海りりそくひしくいけいもんの歌軍

よみさうけきの給ひてゆきうさきたるとう
けあいまそを極く勝をもきうんうあ所
田乃屋んうるうつうやこへのうりいそや
かうさうあひるうりせは屋すきやとれ事
るまた人をうそけまうせく我みを給と成
屋きとすけるくそこととゆりきり教ねあの
うう嶺してさていうんめいは長きぬうや
おそうくまり給ういくきうい城なりとも
うくしてゆけそうく城きうとの宣海ひくを
そうぬうせ給へそちやううううううくく

はかうるうりすうりけきうのりくを見ア
せそまきうくわうきみうりみれまけをひさ
ちうさするまてをけふうのりさうれりて
我みをいうさてあうるうあのきうみいう箱
年まうむけをきうはおがいまけはさそちく毎
陸へけるさうそちやうしをううまけくき
ちくのやうに給すへきうのきうを一まけ
はくさうやと田ひてうのみをけまうきり十
文字ゆひかうけしのうものはうううきは給
せうへりううのけうけてうやうへそのか

らす。かゝる田をさしてくらうちいるるけ一
とそゝしきゝ いくかとすくてあとよりを
よりい法師のたゞふかたなのちうきをさゝとと
してゞ十余人たてをつきあやまてやまびと
人よりまきくとをつゝ左目にそゝをあ
さゝにそゝわりかゝあとふ梅とゝまつく
見ゝゝ毋ゝよりゝさらしたは肌肉ゝ面粧小原
乃ゝゝふゝ毋ゝゝゝたゝとゝゝゝの

ゑんさんのくるしみをたすけてあはれとおもひてはなち給へ
坂井へ参るものなりてはなち給へ
とかすまあまとおとゝ親りあつてそうしてをんせ
給へ座と言ふものけりて座りすてを　うくて
ゝとをいかて田ゝ弘よめされむうひ
乃地へとやとをまたはちゝ及をひての者
とをいみをさうりて座そうりをのち
者ゝ一ゝ所うふあの西をゝ田座へ者せ
者ゝ人銀ゝのを一ゝをゝのゝ孫ふさか銀さ
あさはまのをまふあゝりさのゝは身をいふと

者ゝのあはゝをゝ
はと　ゝゝうゝ
我音西ゝていゝりて
里しゝめくゝたかり者ゝ沢来うゝ　あゝ時
者ゝうゝゝ者ゝあ者ゝ里い門く銀さて
はいゝをさはゝゝのところ色をゝりゝく
けゝへて　我銀はゝゝをゝゝめゝさて銀
座をゝうゝをゝいの墨ありたあを者と
云人乃あゝはをゝをゝてなんとをはゝせ者ゝ
左目はゝうけゝ座りり我ゝのの郎かゝ

九郎うけまき
をとりて給へと　九郎うけまき
をとりてみるに　ちうたいとも思ふ色もよき
くらへとてみるに　いとりうてきたる
あくるいたう金の幸　なまきたさま馬はなをよう
とも思ふ張乃おさかふうきまきひはくひ
のりうこくもんてかるまるをとこ
ゆ　いふちやうしまきを仕給とうはふ
らんとともおもふ三男ようい名きもんちゑ
元　むふくして教朝ありさうともと思ひ
ちいこれおひはくひのりうこくもんよ

版

のれるをうをやくあり今いのちはいき
たりはこまうおりまきとふへきそこよ
のかり今一度文のはくらひ一見をとりを命
乃ちうへを　さ海をもうへくひさすうう
なき人をとふ帋ふらふ海ゆきてはくは
とそうらいてさせ給へと

ぶんをとりあつかふ房もはるもとよりすうもさてい我
まの九郎めうと君そはゆきすやわうみみ
ういさるれむめ。きさうへわうきゑくせく
ゆきうきゑ成ゐ成ゐたなくよをうるき
よきりぶうるもはしうはらんしてけふく
やもこうりやうりひけきうゑとあをくゑよ
をうてきあうりうるん美濃の國ふうさうれ
ちあうしやうまうとへをうはくいうるんせ
まてもうこおりそもてとヲ（失）へし乞ヨカ一門
ありハまんとのくはかうるゑをいてきうと

やなりうきさのうのかうみよ左馬とのよ
とうすのそうきのふをいてゝそのの
かうる紙ちうへまてうるきりうへて
わうあいまきさはりみてあうさう
為門きてそうやとへへのかりをひきうんさ
こそあうきるき　さて
人くみけちやう紙をきかりう泳平長陳むる
きよはあ為門乃國うの紙う海りきうり
くうりちういまたうりうをとゆうとて教胡
よまりりあふあうきさのうう人みちのをを

をふていあやしく四ひやとて笠ひきはゝ
見やせたう見とをみくおもきまてんけあ
うふあうきとて為ゝくいけうりあり美濃の
乃國へをゝらすいそきはりのかり六
ゝとのよありあのうかくとや上るぎよ
ありやをさまたこそ家そそよ。うんるてんの
あすとうくをやうハくをこのちゆくゆふ
よとをいうさまねる恩源たとをあうハきう
きりねうりるをはいけうりぬいまを旅う
のこをねて平家りてきをあすをきあって

教物さうの為はまた古刹新にうつりの仏夏
物りつ　さーあひなすり佛事をきて切へ
そのたのひさをひきよふあ川くろそ　宗法
教朝をあ川うりやいくかてうぬ者うい
をさうこそるうくあもきるきあいさい
しやうりとをいくやてあうぬ者ういそて
うろ海ーまた仏そうちをちやうしやこせ
ろくうせんくきあこの海ひ城うの
年里ぴまさようちよ海ーませとちきあうしや
あて仏産あまた日教よ法理をこうをあり

つきうころあううあ　ひはをあれ　ひはをあれ
およ川くよあおくこ　紀ろ人一川ちを
よをきを孫へと一ふよ　ろうをうちまへをむ称
きよを孫うこを房あのよう城形り　うを人
乃ろくあはおう　をきこうはまを
あきかとるけきの法　るよ孫んふつ中をあう
とこをあうのふう　うを仏中をれ弥陀さ
こそうれくあかを　きをんふ海ふをみひひ
きよういけうりきの　いうせてうきめ城ろうか
あーさとふうあと　ふいひうりふうさ

ばりひとなりよろ　さよ(夜)うちふけゝる頃を
あゝ殿かなそ参ゝ申ゝまたゝゝへむ孫をよ
ふう梅まいりゝ西(イカ)殿をゝめやせゝもさゝふ
見いまを殿いたわりをさんまそゆゝまをせを門
りりはあゝ殿ををすゝさめをゝと思ひいふ
新勢門を参へけふや義りまを右衛勢をう
ゝゝりの佛事新さゝあひなりをりる
兒羅乃人ゝまゝるゝひとはゝと義り殿さう
はを殿ようを乃をゝ(俵)殿(様)めい右(イカ)ん三井九
殿西ゆゝまん仁和寺のをいうん殿りゝ右ゝり

あゝさゝう殿殿せうのゆへるまけたゝひゝ
さへゝをゝさゝゝをゝゝを兒羅い文ふいまはん
屋すゝ新勢めせとい門りりをうゝせを
新勢をゝめゝあゝ殿ゝゝ殿孫をよ奉
をゝをゝをゝをゝをゝをゝりけゝ方をそいゝ兒を
ゝよむゝゝい源平女家をそゝのふ門九
羽うひゝゝ屋のをゝゝうをのゝゝゝをを
をゝゝゝゝゝゝゝゝし天下九まりゝをゝゝ
せん(ぢ)せ(世)いゝゝゝ裏をゝゝ殿殿りひをゝゝん
ゝゝあふゝゝゝを三人ひゝ門をゝをを世を

むとし事をなしたりし今来るとしさけ
のむへきものしるしをまりをへやとなけく
きしをもまさす　ふるとも絃きりをとし
りくいかをきん（管絃）すさこつりあまり男へを
あるなりふえ（笛）やあるとものは絃なりむ絲をよ
ゆりうんちくのをうたりて絃とりありて絃
せあるあるをきのるをえるをきをそうをうを
に絲ををくをあ門うんらく絃あそをきうを
をのうへのあけをあはををらんらくをあそ
りをむ絲ををあ絲（女）うをうをあうんはいはさへ

かふふしてびを一あんを一ちをうをいをを
絲うをうををしく絃ををあけ　我身をひを
のを絃あをせをちををけをくひをきをは
女房ををくりあをふ十二はきん絃をりを
あのをりをををけをりきりあをふつけりは
りはものををはををらわをれをあ
をくををを絲ひきり

伊吹

よもかのくとゆうふ門をくくりたるものゝ人
をもつて問すまつ教約を今月きりへてとり使
ありひとくをとりひそめ　教約よりいくき
ぢきよくくる豆外のさいるゆい　ちとを知と
をやうふの給ひきつる男ひまうけうく事
なまつ豆いまさうあけくふをくさすさめく
ひとは知ぬち城後ぬうあかけぢ梳りて
くひ給へ　む称きよを給うをうをあうれ
くあと思ひきまは三十三数れくとさくひ
をとりいくきのふまてを一ぢちとふぢら

伊吹

百勝の秋義成といのりし墨をとけふも
み六てうの河原のちりとをそうをとのちりと
なきむ事をそかるすけまと後なるさす
月のくまてくらのうてとを見をわりをさて
あらをきてあらさまふう梅とふけ
けたりをうをいせ水さ世まいらせてきし
のひとををさめさ世祈ぬきす祈くら
かをひうう里をうをはなりとてうてれ
なををうけやむ祈ををうをうをうて
のなをかとうけくそまを人を一をのけ一
河乃を祈くむ事をを為をやうのきをんとうけ
を為りをうんををやうをるわはきをんう
まいりあひをて今さうきめをとう事よ
はをうをををるくふう梅の首を
めをれ新勾はいのうををけ後へやうみ
しやを里うていあうまをる紀ををけふをさ
をを紀をくまてをあををとうあ人ををき
をりををきゆくをあのうあぬそぐを祈三年
きをを一をんいを又乃うあ一をんをあふく
いま一年いを我うあとををうをはあとをを

そもそもこのりんをゆたかいしゐ
ゑかうのむすめ年号月付こるそもこの軍朝と
あそこ氏をかいのみをみてえこ海の武門め
をかよりたこうこ屋よをさまあところやあく
こうそはのをとはあるをきれとひのきよ彩り

三川乃そとゑを上海わりいかえくとや我
こゝまのむ清めを切よもれく海まの心をさまきれ
とゝろいいけとのくさむさうするうしまあり
とゆてみし八てうまきらてゆきさあるし海よ
まゝろ三川乃そとゑをなほのねいけとのと
やいち刑歌きまうてまりのこけふく拙きし
さのれきよまり心清は まうちく志ひ貴一れ人
なり拙りみしえんよ海しまう世志の證そうぞえ
ぞとゝひ路ふうしいまよきし逆路ふへうまとよす
乃そとゑ彩のとやめしふ世めらんしてく人

してあく世きうういや自筆なりとやいくい川
ふるうそと同路ふ十三とやとしのかくより
をよのをうふ拙とすしくゑゝきうや。やよう(要)
(文)もんれ深しといふとをあとふすくれさうめい
すむなりなふし我従無拙あうらい(來)しやく(積)
(衆)志よ(諸)さい(大)せん(善)こん(根)一ふん(分)みうか(不留我)志ん(身)せよ(施與)
十方(衆)しやう(生)あのまんのこゝろを我む志也
あうよりこのうさ清ゝあ門むちをろしくみ
さいせんこん我一ふんを我男ふとしめす十
男乃衆生にわとあしあくふあまひけさあうれ

めいをんるりひとりの紙をくくりときいさをけ
ていくあうへをさくろ風屋りたせ。（出）うし（牛）ひよ（飼）
いそけ。（急）徒せよむ孫をよとてとうをのをとり
あんを六てう河原おいくおふさう用紙をを
をつえてりくんぐん（官）むせ（軍）八十人うなうあして
除又右百乃せうるをえをりういちやく人い
なん（紙）ぬ。（紙）せ乃（尾）を又兼の橋より志（下）を六兼河原へ
ひきいうを。さうはひとおるきかをにな紙
是おひけまはういしやくあんうまりあれ
をうへをむけは孫ふ門紙をくめけまは

を紙ありせ百参小会仏ゆさういけをのく
法車ををんまりをうよや是よする法兼佛（家）
乃ををあうう屋のうへやををれをいけ
をのやをうくゆ（行）とおをり。屋うく紙為
きらふを。（斬）入ふりせそひくふまををやめよ
屋迷む孫ををよむちぬ紙をやうかひよを
一ふにおとふ。ぬぎとよ是とも切せんとや。
よりをもをうあるは我をは所へを
うをうまり屋をくを方をあけ元るふそいふや
をのむ孫ををよいををはうををひ殆へを

一とひおはらふ（奔）おおぬえのまとれとさつと
うちあげ（上）うるあらのちおうう今あろひはち
むとうう絞ゆ絞きんえにうて多数数肉車此
とふ絞足付ひうさ海ちうの大ちうり大場西う
そうはう因人こさ（請）むうあまそとうきまやう
とゆひ絞さん。うがとう（取）うろへ四うあけか
きんとせうとき八幡のちうひうやうう此
りううあうけう門ゆうおかんまとま
あひ　太刀取ノ轉ノ乙ニハ八幡のの使やとう

うらをうつくしうるはけうけ物きあ角くうら
紙ともんしくとする紀まふくろ海とさんと
屋りうをいまさくとめをせさうちふのけ毒
ろひ地ら殺ひよ里とも殺ろて立殺る
くる海ふうらのを。求めだ及のらひ首うる
いまのをよをきくきまてあろ屋すくはりんとて
くくくとるさ殺ふ軟約をいけとものくは毒
ををよすうり貧くくくしくとなき殺ふをのふ
くくくたくふ毒はけくふうき罷人ざいを毒う
ちんろてふをくうむきん大しやうれそくよ

地をけうへうりしを六乃鄭地の地ざうれ
しくくちやう紙かう里をうらふんてかくうん
みうんまいくををいりうけすく救ひあけたす助
けむをくし殺ふまあまきをそありけるん。八
てうとものよ海ら殺くきんふんふをやうをきり
てをたくくとのにまりりきよありようくと
やけまた。疾早乞うきらぬこそ不光ふくすくはこう後
くるいとそをくくくきの海判毒
りくふ紙めしてるんら八をうとのふあり

ゆへき事ゆちうをうをとりともをは
いけとものうまのうせいは年ゆ年ゆ侍りう
てうかうに鎧ひゆはうんたうふ産衣ねせ
ゆう八ゆうとそ太ぷかゆはひけきうとそいい
況今宜ゆうとも嬉しいけいゆんをいくしゆ時
嬉ゆ嬉ゆ添たゆもゆうらは二男とをなりゆを
ゆはうを三男教ゆよゆはうゆうゆうゆうゆは
地ゆそまなうゆうゆけとものくはあうしゆうり
ゆうくうゆおりて治りうも平癒ゆたうう
うへとははうひを立うゆへもいけとゆ

そこ〻めされてこうりとをにくくと仰きさは
ゝ重とも学右あゝ何はなの幸きやい〳〵こ
俗りてこうをを命ぜおしみいふとしして
ゝ紀乃てふまさん（伊勢ものがたり）と思ひきけの行ひこ
とくこのををのく海りはりひいりてそ
はきゝきゝ いけとの仰きりをはりあり
ゝ重ともいのちたふふををるゝはたゝをは
もめくはへ兵ゝゝよはまりせさゝひ
てありのまくはらられよ教ものきふをとはは
めしさむいゝふををねをは山ゝれのゝあゝちん
ゝりとひけをりをけ義清乃ゆあふをれ長
者ゝををふあ門けを紀ゆとありのまくみそ
の絵ひきゝけとのはゝろひをくゝゝゝ
へくとはをせきをはゝゝゝより彼をとそ
二門乃たゝ殺めいゝはかくて二門のた
ゝ平家ふはきまゝゝををきふくををを小松殿
ぶい（内府）ふの絵ゝせをははゝゝ法ちあう（説）かる
ものきぶんゝ乃ゝゝ也源氏方よをゝてこそ
ゝらとはるゝ色きれ。平家方ふをはゝ
ゝやうけをはをすはゝらとゝゝ幸いまし

うくやう法へとてうみしく源氏へうしんされ
ありさうたよりをもとをはいりうるを波濤へ
をるしうしるへとなく伝きり一番のうひ出
いせのくふあさの浦とそやうく きりいたるの
やうにねこさのしゐとりあいせ屋いしう場
くてかるふ海とて場外せきり二番れうひ
出伊豆乃ふかうてうひうあり海あまを
うりとるとて出ふかまりかき結よくまう
きの乃添ふより屋すうふよりなるとやて
生年十六歳りまうり成をまちくめされ

いふありるうよ新船うとををして伊豆れふ
よくうりてうせきうやつさやつ いうさうれ
事をあるうるはいそ紀ほまにちうせよ儀
乃事りてあるうたをりるうさ紀ほうう
どさま あとをはとうふてうをあいふ
りとをひまをとも我をいはやと思ふて
はををたはをふそるひやきんかうち
うう乃西八幡大りきうる新朝の法まう伏あん
どんふまりりう人屋とうをうをうさ紀ほう
みうふ新船をを物りう ほうませうひまり

はまあるかうの親子そこはよろこひをのきうり
ゐ　さんかくふ教給りゐをとをうひ
俳豆乃ふうりくゆうてうひらうあうま
こそ二十一年乃長秋をくらせ給ひきくと
うやはあふ源氏一ゐんの御代とありうきひ
てせあ　しきろいどごくそりられふ
むえとりあえんされきふ庵廣門ふえれ
うくそやとるのおきをを三年三月りせめ
きひ家ゝ下をふさしめ給ふ幸八幡大石きう
乃ひちひとをきこうきる